海辺のさんぽのススメ

■海は生命のゆりかご

日差しは暖かく風はさわやかで、海辺の散歩が楽しい季節になってきましたね。磯には生きものがいっぱい！せっせと砂だんごを作るカニ、プルンとまるまったイソギンチャク、岩のくぼみに貼りついたヒザラガイなど、さまざまな生物が初夏を謳歌しています。

しかし宇宙に目を転じれば、海のある惑星は私たちの太陽系では地球だけ。海辺のまち蒲郡に住む私たちには当たり前のこの生命あふれる光景は、とても珍しい、かけがえのないものなのです。まさに宇宙規模で！

■石っころから生まれた海

地球に海をもたらしたのは、隕石だと考えられています。

はるか46億年前、誕生して間もないころの地球は、ドロドロに融けたマグマの海に覆われていました。そこに降り注いだ大量の隕石の中に、水が含まれていたのです。灼熱の地球に飲み込まれた隕石の中から、水は水蒸気となって逃げ出し、大気になって地球を覆いました。

時がたち、少しずつ地球が冷えるに従い、水蒸気は雲をつくり、やがて雨となって降り注ぎました。その豪雨が地表にたまったのが、海のはじまりと考えられています。太古の岩石の研究から、今から40億年前にはすでに海ができていたことがわかっています。

■知るは楽しみなり

海水は蒸発して雨になり、川となり、世界を輪廻し今を生きるすべての生命を支えています。もちろん私たちの一部も、宇宙から来た水でできています。

そう思うと、海辺の散歩で出会う光景が、いっそうきらきら輝いて思えてきませんか。

マーチソン隕石
生命の海科学館に展示されている、およそ46億年前の隕石。にぎりこぶし大の黒っぽい石の中に、大さじ一杯の水が含まれています。科学館では、水を取り出す実験のようすを動画で紹介しています。

蒲郡の交通の歴史を変えた運命の分岐点「東海道線の誘致」

東海道線の浜松―名古屋間が開通し、蒲郡駅が開設されたのは、今をさかのぼること125年前、明治21年（1888）9月のことです。

東海道線は、はじめから蒲郡を経由すると決まっていたわけではありませんでした。当初の計画では、旧東海道筋、つまり現在、名古屋鉄道が走っているルートを通す予定だったそうです。しかしながら、御油・赤坂から岡崎へいたる道は、地形がせまく、坂もきついため、当時の技術では、鉄道を走らせることが困難でした。

そんな折、神ノ郷村出身で、当時、宝飯郡役所に勤めていた永島藤六郎は、「蒲郡ルート」を主張し、明治政府の鉄道関係者に対し、次のように進言しました。「小坂井より西方・蒲郡・深溝を経て、岡崎に至り候時は、ほとんど平坦、急勾配を要せずして、工事容易ならん」、すなわち、蒲郡ルートは、地形も平らで、工事も簡単であると。

藤六郎の家は、代々、神ノ郷村の庄屋を任されてきた家柄であり、藤六郎自身も、地元の人々にみかんの栽培をすすめるなど、地域のために尽くした人物でした。旧東海道筋では、「鉄道に客をうばわれて、宿場がさびれてしまう」「農作物が汽車のススでだめになる」といった反対運動があったといわれていますが、先見の明に優れた藤六郎は、地域の発展のために鉄道は不可欠と考えたのでしょう。駅の開設は、蒲郡の観光・産業の成長に大きく寄与しました。

蒲郡の東西を走るJR東海道本線